かちかち山

芥川龍之介

童話時代のうす明りの中に、一人の老人と一頭の兎（うさぎ）とは、舌切雀（したきりすずめ）のかすかな羽音を聞きながら、しづかに老人の妻の死をなげいてゐる。とほくに懶（ものう）い響を立ててゐるのは、鬼ケ島へ通（かよ）ふ夢の海の、永久にくづれる事のない波であらう。

老人の妻の屍骸（しがい）を埋めた土の上には、花のない桜の木が、ほそい青銅の枝を、細（こま）く空にのばしてゐる。その木の上の空には、あけ方の半透明な光が漂（ただよ）つて、吐息（といき）ほどの風さへない。

やがて、兎は老人をいたわりながら、前足をあげて、海辺につないである二艘（にそう）の舟を指さした。舟の一つは

白く、一つは墨をなすつたやうに黒い。
老人は、涙にぬれた顔をあげて、頷（うなづ）いた。
童話時代のうす明りの中に、一人の老人と一頭の兎とは、花のない桜の木の下に、互に互をなぐさめながら、力なく別れをつげた。老人は、蹲（うづくま）つたまま泣いてゐる。兎は何度も後をふりむきながら、舟の方へ歩いてゆく。その空には、舌切雀のかすかな羽音がして、あけ方の半透明な光も、何時か少しづつひろがつて来た。

　黒い舟の上には、さつきから、一頭の狸（たぬき）が、ぢつと波の音を聞いてゐる。これは龍宮の燈火（ともしび）の油をぬすむ

つもりであらうか。或は又、水の中に住む赤魚（あかめ）の恋を妬（ねた）んででもゐるのであらうか。

兎は、狸の傍に近づいた。さうして、彼等は徐（おもむろ）に遠い昔の話をし始めた。彼等が、火の燃える山と砂の流れる河との間にゐて、おごそかに獣（けもの）の命（いのち）をまもつてゐた「むかしむかし」の話である。

童話時代のうす明りの中に、一頭の兎と一頭の狸とは、それぞれ白い舟と黒い舟とに乗つて、静に夢の海へ漕（こ）いで出た。永久にくづれる事のない波は、善悪の舟をめぐつて、懶（ものう）い子守唄をうたつてゐる。

花のない桜の木の下にゐた老人は、この時漸（やうやく）頭を

あげて、海の上へ眼をやつた。

くもりながら、白く光つてゐる海の上には、二頭の獣が、最後の争ひをつづけてゐる。除（おもむろ）に沈んで行く黒い舟には、狸が乗つてゐるのではなからうか。さうして、その近くに浮いてゐる、白い舟には、兎が乗つてゐるのではなからうか。

老人は、涙にぬれた眼をかがやかせて、海の上の兎を扶（たす）けるやうに、高く両の手をさしあげた。

見よ。それと共に、花のない桜の木には、貝殻（かひがら）のやうな花がさいた。あけ方の半透明な光にあふれた空にも、青ざめた金（きん）いろの日輪が、さし昇つた。

童話時代の明け方に、——獣性の獣性を亡ぼす争ひに、歓喜する人間を象徴しようとするのであらう、日輪は、さうして、その下にさく象嵌(ざうがん)のやうな桜の花は。

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。